

ある高校生の行動と「積もった雪」

2022年1月21日の神戸新聞に、家出中の少女を見つけて保護した高校生の話が載っていました。

昨年12月夜の駅前で、高校生がコンビニで夕食を買って近くの塾に戻る途中、重い足取りの制服姿の女子中学生を見かけました。「どこに行くの？」と声を掛けると泣き出したため、塾まで連れて行って話を聞いてみることにしました。



少女は、最初はあまり話したがらなかったのですが、高校生が部活のことや、きょうだいのことについて話すうちに、徐々に打ち解けていったそうです。そして、1時間にわたって話をしたあとに、少女は家出をしてきたことを打ち明けました。



高校生はいろいろな話を聞いてあげた後、「…一緒に帰ろう。」と話かけ、少女の自宅の最寄り駅まで一緒に向かう途中で、捜していた親族と偶然に出会い、送り届けることができたそうです。

1月22日の神戸新聞「正平調」では、次のように続きます。
・凍えていた少女の心が優しい声に触れ、ふっとほぐれたのかもしれない。“涙のどおり道”を通して頬にこぼれ落ちたもの、その温もりを思う。俵万智さんの一首が思い出された。

「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかさ

心も体も凍え切ってしまった子供と、温かく寄り添った子供。氷丘中学校の地域にも、この子供たちがいるのではないかと自分ごとのように思います。

『共に生きる』とは、相手の人権を大切に思うことから始まります。では、どのように思うのか。このことについて、金子みすゞ（詩人）さん自身の生活から生まれた詩が教えてくれます。

上の雪、下の雪、中の雪……

雪の辛さやしんどさ、さびしさを思いやって表現した金子さんの感受性に胸を打たれるとともに、金子さんの共に生きることのできなかつた境遇に、誰も寄り添えなかつたと思うと、心が苦しくなります。



人権同和教育を通して学び続ける“感受性”を、高校生の行動や金子みすゞさんからも受け継ぎ、心を磨いていきたいと思います。

校長 大山貴史

積もった雪

金子みすゞ

上の雪
さむかろな。
つめたい月がさしていて。

下の雪
重かろな。
何百人ものせていて。

中の雪
さみしかろな。
空も地面(じべた)もみえないで。